

デトロイト・エリア・スタディー

相田真彦

シヴィス・アナリティクス社

3月のミシガンは気温がかなり低くなり、気温は零下20度を下回ることもある。寒くて堪らないと不満をこぼし続けているトルコから来た同期の学生と歩きながら、家のリスティングをしていた。「リスティング」とは文字通り、家屋の存在を確認して地図に記録する作業である。私は、寒いには慣れていたが、リスティングをする地域が、やや貧しげで、寒い事もあって他に誰も道を歩いていないのが不安だった。半ば崩れかけたトレーラーハウスを前に、これは人が住んでいるのかそれとも放棄されているのか、思案する。放棄されているのであればリストには載せないで、郵便箱や電気メーターの回り具合を参考に探ってみると、何処からか出てきた犬に吠えられ、びっくりした同僚と私は一目散に逃げ出した。

当時我々は、ミシガン大学の大学院で調査の方法論を学んでおり、実習としてデトロイト・エリア・スタディー(DAS)のサンプリングの下準備をしていたのである。当時のデトロイトは全米で一番危険な都市であり、言うなれば命をかけて調査を学んでいたのである。

DASはミシガン大学の社会学部と社会科学研究所が1951～2004年まで行った調査で、エリア・サンプリングという方法で標本抽出を行う対面式の調査である。この調査を元に、社会学及び調査方法論的な研究がなされ、数多くの出版物を生み出した。

私がリサーチ・アシスタント(RA)していたファカルティーは社会学者のウェイン・ペーカー教授で、彼はロナルド・イングルハートの世界価値観調査(WVS: World Values Survey)とDASで同時並行に尋ねた質問群を用いて、デトロイト郊外のディアボーンに多く住むアラブ系米国人と非アラブ系の価値観の比較調査を行っていた。当時は、アメリカ同時多発テロ事件からまだ数年後のことであり、アラブ系の米国人への偏見や宗教観に関心が寄せられていたのである。私の仕事はDASとWVSを用いてイングルハートのよく知られている価値観の分析を行うことであった。通常、因子分析のプログラムは欠損値を扱えないので、私は多重代入法を行い、その後因子分析を行う事を

行列プログラミングを用いて書いていた。調査産業は、その裾野の広さという点で自動車産業に似ている。ピラミッドの頂点にグラントを申請して、論文や研究を行うプリンシパル・インベスティゲーターがおり、調査の設計をする統計学者がおり、調査の実査を行うチームがおり、博士論文を書いている院生や、チームに参加しているポスドクがいる。大学院生のRAの私は、一番下っ端であった。当時のミシガン大学のモデルは大規模な社会調査を行うことで、就業機会を多くの人に与え、それを原資に多様な人材と才能を大学に惹きつけることを魅力としていた。

ただし、DASはこの年(2004年)を最後として終わってしまった。回収率が年々下がり続けたために、得られる標本数が減り、費用の割に合わなくなってしまったのである。一部の政府統計を除いて、調査の主流はエリア・サンプリングから電話調査やインターネット調査に移行し、実習として対面調査をする意義が薄れたこともある。

ただし、時代や調査の方法が変わっても、対象とする世界を自分の目で観察して、身近に感じることの重要さは変わらない。例えば、調査データにおいて集落(cluster)がいかに重要な概念であるかは、道を一本越えるだけで人種や貧富の差に大きな違いのある米国の都市にいるとすぐにわかる。最近、筆者は南コーカサスに位置するジョージアの首都で出口調査を行う機会があった。ある地域は、昔からのユダヤ人の居住区であり、丘の上にはアルメニア教会があり、町の端には労働者の住宅が建ち並んでいる。各々の投票所で、教育の程度、収入、職業、人種が異なり政党支持に違いがある事は、政党ポスターからも伺えた。そして、それらの地域属性を層化のデザインに反映したのである。投票率と、社会経済地位には正相関があるのでそれも考慮して、等確率で投票者を抽出するため、投票地点では系統抽出を行った。

データ・ジェネレーション・メカニズムを理解して、それに即した測定の方法を提案するのが調査研究者の仕事であり、私のデトロイトでのDASの体験は今でも生き続けていると言える。



Column

世界の
調査日本の
調査

日本語の

鶴岡共通語化調査と岡崎敬語調査

年調査

杉戸清樹

国立国語研究所 名誉所員

現代日本語の変化や動向を〈定点・経年〉の臨地調査によって追いかける研究が戦後間もない1950年ごろから継続されている。山形県鶴岡市での方言の共通語化の調査（以下、鶴岡調査）と愛知県岡崎市での敬語使用と敬語意識の調査（岡崎調査）である。どちらも、1948年に創設された国立国語研究所（現在は大学共同利用機関法人人間文化研究機構の機関）が、当初から開拓し展開した言語生活研究の一環として続けてきた。

〈定点〉として鶴岡市・岡崎市の地域社会を選び、〈経年〉として20年～35年の間隔で、基本的には質問項目を変えないで、各回400名ほどのランダム・サンプル回答者と、前回・前々回の回答者（パネル回答者）を追跡して調査する枠組を持続している。すでに鶴岡調査は第4次、岡崎調査は第3次までの調査が実現している。世界的に見ても定点・経年の大規模な言語調査は今も数少ない中で、鶴岡調査や岡崎調査は特筆すべきものである。

調査は、初期のころから、例えば統計数理研究所の林知己夫氏をはじめとして、統計学・社会学・心理学など多分野からの参加を得た領域複合的な調査研究として進められた。それぞれの第1次調査の報告書には、方言や敬語などの分析・記述とともに、当時なお発展途上にあった社会調査やサンプリングの理論や手法を当の調査で実践的に模索する経過も記述されていて、〈社会と調査〉の領域が日本で始動する姿の一つに接することができる。

鶴岡調査では、鶴岡地域固有の方言が全国共通語（いわゆる標準語）の姿に変わっていく動向を、1950年、1971年、1991年、2011年の4次の臨地調査で追跡した。性、調査時年齢、職業、学歴、社会生活（他方言地域への往来、外来者との接触など）、マスコミ接触度など、回答者の属性が、共通語化・方言維持にどのように関わっているかが関心事である。例えば、高齢の人が方言を濃く残しており、若い人ほど方言が薄く全国共通語化が進んでいるというのが一般にはなじみやすい捉え方だが、第1次～第2次調査からは異なる見方が提示された。20代半ばから30歳あたりの年齢

層で共通語化率が他より高いこと、その背景に活発な社会生活があると考えられることが示され、この年齢層の次には20代前半以下の若年層で共通語化が進み、30代後半より上の年齢層はその次に続くという年齢による共通語化過程の予測モデルが提示された（第2次鶴岡調査報告書）。その後、第4次までの経年データを通じた分析からは、共通語化の過程が「S字カーブ」にあてはまるという指摘や、時間・年齢の関わる属性を、調査実施年、回答者の調査時の年齢、属する同時出生集団（コウホート）などに区別して扱うことの意義などが示されている¹⁾。

一方の岡崎調査では、地域社会の敬語使用と敬語意識をめぐって1953年、1972年、2008年の3次の調査それぞれにランダム、パネルの回答者を調査した。経年調査ならではの知見として、第2次調査結果は第1次と比べて、丁寧な敬語の多く現れる言語場面ではより丁寧になり、ぞんざいな言語場面ではよりぞんざいになるという変化が指摘された（第2次岡崎調査報告書）。また、第1次で若年層、第2次で中年層、第3次で高年層にあたる一つの同時出生集団を追いかけたところ、高齢化するのに従って、表現全体が長く丁寧になったり、敬語形式の丁寧さが増したり、敬語「～いただく」が増えたりするなどの変化も記述された²⁾。

鶴岡調査・岡崎調査それぞれの具体的な解説や調査票の情報、さらにデータベース化された調査データ（鶴岡データは現在第3次分まで）が国立国語研究所webサイトに公開されている³⁾。調査報告書は、上記サイトや国立国語研究所学術情報ポータルに拠っていただければ幸いである。

1) 横山詔一他編著『社会言語科学の源流を追う』（シリーズ社会言語科学2）の井上史雄論文、中村隆論文（ひつじ書房より2018年刊行予定）。

2) 井上史雄編、2017、『敬語は変わる－大規模調査からわかる百年の動き』大修館書店。

3) <http://www2.ninjal.ac.jp/longitudinal/index.html>